

ミステリ読書案内

2023. 5. 27 発行元

第481号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

田中啓文の音楽ミステリ

田中啓文の「音楽ミステリ」ということで『落下する緑』から始まる『氷見緋太郎の事件簿シリーズ』と『サクソフォンに棲む狐シリーズ』の二つを取り上げてみようと考えた。共にジャズがテーマになっている。

『落下する緑』

田中啓文は1993年に鮎川哲也編の『本格推理』（光文社文庫）に『落下する緑』を投稿して入選し、作家としてのスタートを切った。その後シリーズ化されて『ミステリーズ』に連載され、2005年に7編収録の単行本となり、東京創元社「創元クライム・クラブ」の一冊として発刊された。

田中はその後SF小説や時代物に手を広げるようになったが、スタート時は本格ミステリの書き手だったので。「音楽好き」は特に顕著だ。「ジャズ愛」を感じる。

『氷見緋太郎シリーズ』

第一話の『落下する緑』。唐島英治クインテットのリーダー・唐島が「私」の視点で物語る。唐島はトランペット奏者として有名。唐島がテナーサックスの氷見と一緒に訪ねたのは宮堀重吉の展覧会会場。宮堀は日本の抽象画の第一人者。

会場に到着すると、宮堀が弟子の菊池を頭ごなしに叱りつけている場面に遭遇。その後、一枚の絵が上下逆さまに展示されていることが判明。昨夜あたりに誰かがその作業をしたらしい。抽象画は上下がわかりにくいこと、宮堀がサインを書かないことが関係しているようだ。

この謎に挑戦するのが氷見。日頃、音楽以外のことは考えたことがないように見えるのだが…。この第一話だけは音楽からちょっと離れた展開になっている。

以降、天才トランペット奏者が消えた謎や3000万円のウッドベースを壊したのは誰…など、「日常の謎」に近いものを次々解き明かしていく名探偵・氷見。

『辛い飴』『獅子真鍮の虫』

第一話には登場しないが、ジャズ演奏に関わる描写は至る所に出てくる。氷見そのものが型破りなところが、熟練した技術の部分よりは、何の制約も受けない即興の部分

田中啓文と「ジャズ」

創元の『氷見緋太郎シリーズ』の3冊には『田中啓文の「大きなお世話」的参考レコード』というコラムが各編の間に掲載されている。基本的に『ジャズの名盤』紹介である。私自身はあまりジャズに詳しくないので、書かれている内容を十分には読み取れないけれども、その伝えたい熱量の大きさは理解できる。懐かしいレコード。

に重きを置いている。好みの問題で、他の奏者や聞き手と対立することも多い。氷見が一步一步成長していくところも本シリーズの読みどころになっている。

「ジャズ」という世界の面白さも田中流に紹介されている。現在、ジャズが若者にどの程度浸透しているかは私にはわからないけれども、本書を読んで「ジャズも聞いてみようかな」と思う人が少しでも増えればよいのだと思う。

唐島と氷見はやがてジャズの本場、アメリカへと脚を伸ばしていく。第三巻にあたる『獅子真鍮の虫』では更にブラス（真鍮）の魅力が書き込まれていく。国を越えて、人種を越えて音楽は広まっていくというメッセージを受け止めよう。

田中啓文『ウィンディ・ガール サクソフォンに棲む狐Ⅰ』

2012年光文社。本書の続編『ストーミー・ガール サクソフォンに棲む狐Ⅱ』は2014年に出ている。「ウィンディ」はポケモンの名前ではなく、「吹き鳴らす楽器」のことである。アルトサックスを演奏する須賀瀬高校一年生・永見典子が主人公。父親が二年前に亡くなり、東京から離れて母親と二人暮らし。高校に入学して、吹奏楽部に入部。アルトサックスの担当になる。ある時質屋の店先にあったサクソフォンが気に入って無理をして買った。そのサクソフォンには霊のような存在のクダキツネのチョコが棲みついていて、典子が楽器の練習をする時に現れて、彼女を励ましたり助けたりしてくれる。典子が出会う不思議な出来事にヒントを与えてくれる。

須賀瀬高校吹奏楽部は、毎年地区大会、県大会は勝ち抜けるものの、西関東大会止まりになる成績。「今年こそは」と顧問の高垣は高い要求を出し、先輩の柿沢は厳しい練習を押し付けてくる。クラシック中心の吹奏楽では音の統一性が求められ、典子は苦勞する。第一話の『ブラックバード』では帰り道の途中にある神社にカラス男が出るという噂が取り上げられる。一年生はオーディションで選ばれた人だけがレギュラーメンバーになれる。オーディション前日に一人の生徒の口の近くにカラスの羽根のようなものが刺さり…。

本筋は典子の父親が亡くなったことに大きな謎があるようなのだ。謎を解明しようとする典子とそれを止めようとする母親の間に溝が生じていく。典子の音楽の行方と父親の死に関する謎は次巻に引き継がれる。